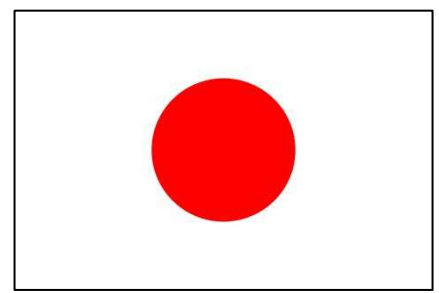
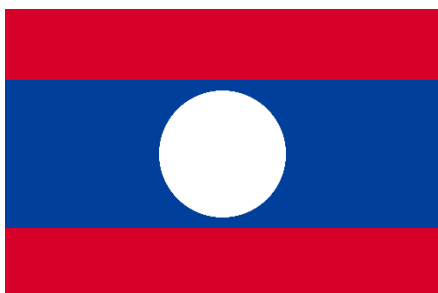


第 33 回
チェンマイ・神戸YMCA
協働プログラム
ラオスワークキャンプ



期間: 2018 年 8 月 19 日(日) ~ 26 日(日)

参加国



はじめに

日本人は勤勉でまじめ過ぎる！！そう思わせるほどにラオスの時間はゆっくり、のんびりと流れていきます。

まずは、このキャンプを支えてくださった、参加者のご家族、村の人々、ワイズメンズクラブの方々、YMCAスタッフ、その他にもたくさんいらっしゃるすべての方々に感謝致します。

8月19日から26日までの8日間「第33回チェンマイ・神戸YMCA協働プログラム ラオスワークキャンプ」を実施しました。日本からは6名が参加、ラオスにてタイ、ラオスのユースと合流し、共に活動しました。

ラオス・ルアンパバーンでは市内観光や博物館、寺院の見学などを行い、ラオスの文化や歴史に触れることができました。また、3泊4日でワークを行いました。ワーク地はルアンパバーンから車で約30分の距離にあるパクムード村でした。村には自動車では入れず、村人たちの作った木造の橋を徒歩で渡って入ります。その村で建設中のコミュニティー開発センターの煉瓦の積み上げやコンクリートを流し込んでの床作り、トイレ用の穴を掘るなどのワークを実施しました。村ではホームステイをさせて頂きました。ホストファミリー宅には日本人キャンパーとラオス・タイのユースがバディとなって共同生活を行いました。今回のワークキャンプでは本当にたくさんの人たちと繋がることができました。またワークを進める中でたくさんのチャレンジが生まれたと感じています。

ラオス・タイ・日本との間には様々な「違い」がありました。各国ユースたちと異なる言語でのコミュニケーションは試行錯誤の連続でしたが、明るく陽気に接してくれる彼等に助けられ少しずつ英語でのコミュニケーションが生まれていきました。互いに理解しようとする過程で少しずつ心の距離も縮まっていったのではないかと思います。

村での生活も私たちにとっては初めて体験する事ばかりでした。しかし、バディたちが物の使い方や文化の違いなどを本当に丁寧に教えてくれました。実はタイやラオスのユースは事前に日本の文化や風習等を学び、それらを受け入れ接してくれていたのです。たくさんの挑戦の裏には様々な人たちの支えがあったからこそできた体験だったと思っています。

また、日本で生まれ育った私たちにとっては不便だなと感じることもありました。しかし、村の人たちにとってはその生活が当たり前。そのことに不満を漏らすわけでもなく、常に笑顔で明るく、村の人は日本から来た私たちの事も家族のように接してくださいました。何か困ったことがあっても、村人たちみんなで協力し、乗り越えていく。多くを求めすぎず、今ある物にある意味満足する。足るという事を知り、楽しく生活しているのだなと感じました。それはもしかすると昔の日本にもあり、良くも悪くも日本が発展していく中で失われてしまったものかもしれません。

様々な違いになかなか馴染むことができなかったキャンパーたちも、村での生活や、人との関わりを通して、それも違いと受け入れ互いを理解しあいながら過ごす姿がありました。本当の意味での「ゆとり」や「豊かさ」とは、単に時間を短くしたり、休日を増やすことではなく、のんびりゆったりとした時間の流れの中で、できることをしっかりと行いながらも、心に余裕をもった生き方ではないかと改めて感じました。

今回参加したキャンパーたちは、多くの事を自分たちで考え、決め、行動しました。その体験で得たものは誰のものでもなく、今回参加したメンバーひとりひとりにとって、大きな経験として心に刻まれたのではないかと思います。

また、キャンプの中でたくさんの「楽しさ」に触れることが出来たのではないかとと思っています。人と関わる事の楽しさ、他の文化と触れ合う事の楽しさ。時には思い通りにならない事もあったと思います。悔しさや後悔もあるかもしれませんが。しかしキャンプで感じた「楽しさ」があれば、目の前の壁を乗り越える大きな原動力になると思っています。その感じた事や肌で体感したことは良い事も悪いことを含めて大切にしてほしいと思っています。そして、それぞれが得た大切な体験をこれから彼らが出会う人たちに伝えていくことが、これからの世界を変えていく大きな力になると信じています。

この素晴らしいワークキャンプがこれからも続き、私たちが体験したような、すばらしい仲間と出会い、感動や大切なものを見つけ、それを通して自分自身だけでなく、世界が良くなっていくきっかけになるように祈っています。

神戸YMCA国際活動について

- 1) 地球的視野に立ち、平和と公正を求める活動や国際理解・交流・協力事業を行います。
- 2) 開発教育を推進します。
「開発教育とは、開発途上国の現状とその背景にある構造的な不正を知り、その解決のために私たち自身の生活を見直し、積極的に行動する人間を育成することを目的とする教育。」
- 3) 国際協力募金運動を展開します。
- 4) アジア・アフリカ諸国への指導者の派遣と研修受け入れ
- 5) パートナーYMCA(姉妹兄弟YMCA締結)との交流と協力
シアトル(アメリカ)、チェンマイ(タイ)、高雄(台湾)、大田・水原(韓国)、天津(中国)
- 6) リンケージYMCA(プログラム交流)との交流と協力
スポケーン、ティラムク(アメリカ)、ブリスベン(オーストラリア)
- 7) カウンターパートYMCA(調査研究対象YMCA)との交流と協力
スリランカ、ベトナム

ラオスワークキャンプについて

ラオス人民民主共和国について

人 口	約 649 万人(2015)
首 都	ヴィエンチャン
民 族	ラオ族(全人口の半数以上)を含む計 49 民族
言 語	ラオス語
宗 教	仏教、精霊崇拜
通 貨	キープ(Kip)



ラオスワークキャンプ

場 所 ラオス第 2 の都市ルアンパバーンから車で 30 分に位置するルアンパバーン県パクムード村の
コミュニティ開発センター



目 的 国際教育・・・フィールドスタディーを通じて、グローバルに課題となっている様々な視点を発見し、
東南アジアの国との関係について学びます。

国際交流・・・国を超えて、顔と顔の見える人間同士の関係をつくり、互いの文化や習慣の違いと共通点を知り相互理解を深め、精神的にまた具体的に平和のために協力し合える礎を築きます。

国際協力・・・ラオスの農村コミュニティに必要な施設を、現地の人との協力の下に作り上げるボランティア活動を行います。

- 内 容
- 1) 村の家庭にホームステイさせていただきます。
 - 2) ラオスのユース・タイのユース・村人と共に働き、レクリエーション他を通して異文化交流を行います。
 - 3) フィールドスタディーを行います。
 - 4) コミュニティ開発センターの建築を行います。
村の女性やユースが地域開発について学ぶ場としてコミュニティ開発センターを作ります。コミュニティ開発センターでは、ユースのための教育現場、女性の為に織物の技術を学ぶ場として、彼女たちの収入を上げることも期待されています。



スケジュール

8/19(日) 関西空港からハノイへ移動
ハノイからルアンパバーンへ移動
到着後タイユースと合流
ゲストハウスにて宿泊



8/20(月) 僧侶への托鉢体験
青空市場見学
専門学校にてラオスユース合流、
交流プログラム(ラオス・タイ・日本ユース)
ウェルカムパーティー
ひな人形等寄贈
プーシーの丘を観光
ゲストハウスにて宿泊



8/21(火) パクムード村を訪問
歓迎会
ホストファミリー紹介
ワーク①
(地面を踏み固め、コンクリートを使って煉瓦の積み上げ等)
ホストファミリー宅で夕食・宿泊



8/22(水) ワーク②(コンクリートを混ぜて、コミュニティーセンターの床を作る)
ワーク③(村の寺院建設材料の運搬、村の道路の整地)
綿織物体験
ホストファミリー宅で夕食・宿泊

8/23(木) ワーク④(トイレ用の穴を掘る)
日本食作り
フェアウェルパーティー
日本の文化紹介(よさこい)
村人・ワーク参加者全員での夕食会
ホストファミリー宅に宿泊



8/24(金) 村の子どもたちとゲーム大会(各国ユースが実施)
 フェアウェルランチ
 村・ホストファミリーとのお別れ
 クアンシーの滝観光
 ナイトマーケットでお土産等購入
 ゲストハウスに宿泊



8/25(土) 王宮博物館見学
 寺院見学
 伝統美術少数民族センター見学
 スーパーマーケットにてお土産等購入
 ルアンパバーン国際空港へ
 ユースたちとのお別れ
 ルアンパバーンからハノイへ



8/26(日) ハノイから関西空港へ
 帰国後、解散



活動報告

ラオスの女性とジェンダーについて

報告者：高月 渚

私は現在大学院でラオスのジェンダーに関することを研究しており、今回のワークキャンプでも女性やジェンダーに注目して 1 週間を過ごしました。これまで資料を読む中では伝統的な男女観が残っているという記載が多く、実際にはどうなのか、自分の目で確かめることにとてもワクワクしていました。

村での生活では、資料の通りに感じる場所もあれば、そうでない部分も垣間見ました。例えば、料理は基本的に女性が担当し、私たちのワークのような力仕事は男性が多くを行っていました。

しかし「女性は家事をするから家にいなければならない」という押し付けは一切ないように思います。家事・育児をする中でも、村の人たち、特に女性同士で関わり助け合っている様子がうかがえました。また私たちのワーク地から少し離れた場所では、雨でぐちゃぐちゃになった道を、村のお母さんたちが土を運んできれいにしている姿を見ました。

「男女平等に」という概念は、近代化を遂げた日本などの先進国だからこそ生まれた概念であり、それを一概に全ての国や地域で押し付けることには大きな危険があると思います。今回のキャンプを通して、女性の権利や社会進出を考えるには、それぞれの生活、文化、価値観を尊重し、「女性が本当に困っているのか」ということを十分に確かめる必要性を感じました。



ラオスと日本の文化の違いについて

報告者：竹田 京生

日本とラオスでは、主に日常生活に違いがありました。

まず、ラオスでのお風呂は水浴びであることです。あらかじめ貯めてある水を、バケツですくって体にかけます。夜に浴びると、とても冷たかったです。次にトイレです。形は日本の和式便所と似ていましたが、洗浄機能がないため自分で水をかけて流します。そしてトイレットペーパーもないため、持参しなければなりませんでした。温水洗浄洋式トイレが普通だと思っていた自分にとっては衝撃的なことでした。また、家族でない人が普通に家に入ってくることが多々ありました。実際に、私もバディと一緒に他のキャンパーがステイしている家に入ったとき、家の人々が笑顔で迎え入れてくれて、村の人の温かさを感じました。私たちにとってラオスは日常生活が決して便利ではないけれど、不自由のない日本と比べて人と人との関わりが深いと思いました。





村に入るときと出るときにバーシーと呼ばれる儀式が行われ、村の方たちが願いを込めながら手首に白い紐を結んでくれました。この紐は今でも大切にとってあります。

日本とラオスではたくさんの違いがありましたが、それを受け入れ自分の経験とすることで、実際に体験しなければわからなかったたくさんの文化の違いを学ぶことができました。これらの経験は必ず、私の将来の糧になると思います。

ラオスの織物について

報告者：奥 瑞貴



少数民族、山岳民族が多く暮らすラオスは古くからの伝統を受け継いだ多様な織物が今でも人の手で一つ一つ織られています。それらは主に民族衣装の巻きスカート「シン」や肩掛け布「パービアン」に使われており、現地のほとんどの女性が着ていました。また、最終日には私たちもそれぞれがナイトマーケットで購入したシンを着て観光しました。

村では織物体験をしました。糸を紡ぐところから織る作業まですべて体験することができました。作業の内容は基本的に単純で分かりやすいのに、コツをつかむのが難しく、かなり苦労しました。キャンパー達で少しずつ織り進めた布は記念に頂きました。歓迎会と送別会では村の人々との他の国のキャンパー達から手首が見えなくなるぐらいたくさんの白い綿の糸を巻いてもらいました。幸せになるように祈りを込めたおまじないだそうです。

また、織物とラオスの代表的な民族に関する展示がある施設にも行きました。そこには日本語で書かれた分かりやすい解説があり、ラオスと織物の歴史について理解を深めることができました。他にも手織りか工場で作られたものかを当てるクイズや実際に民族衣装を着ることができるコーナーもあり、大いに楽しむことができました。

以上のような様々な視点から、織物について学ぶことができ、私にとってとても良い経験となりました。



ラオスの生活～食～

報告者：合田 奈央



今回のワークキャンプでは、ルアンパバーンの都市部に3泊、パクムード村に3泊しました。ルアンパバーンの空港に着いた日に最初に食べたのはカオソーイと呼ばれるライスヌードルでした。カオソーイはタイ北部のチェンマイとラオス北部のルアンパバーンで広く食べられている麺料理です。村でホームステイしたときにも晩御飯に出てきました。私のホームステイ先では、ベースのスープに好みの調味料を加えて食べるよう教わりました。テーブルの上に調味料セットが並びます。魚醤、みりんのような味のもの、



砂糖、コショウ、カピ、トゥアナオなどたくさんありました。カピはシュリンプペーストで、ザリガニのえさのようにおいがしますが、食べるとせになります。トゥアナオは大豆を発酵させ、ひき肉や香草やニンニクなどを混ぜたものです。日本の味噌のような味がしました。また、ラオスではカオニャオと呼ばれるもち米もよく食べました。手で食べます。カオニャオは竹で編んだ籠の中に入っているのですが、まずそれを左手でちぎり、軽く丸めます。その後右手で一口サイズにちぎり、おかずとからめて口に運びます。食事

の時にラオスのユースたちがこうやって食べるんですよと言って教えてくれました。さらに、ラオスの代表的な料理のラープというひき肉の香草炒めもよく食べました。「幸福」という意味の料理です。お肉だけではなくメコン川でとれる魚を焼いて細かくして炒めたラープもあります。基本的に味は辛めでした。しかし、ラオスやタイの人たちは日本人が辛いものは苦手ということを事前に調べて知っていて、辛いものが出ると「それ辛いよ！」と注意してくれました。ラオス、タイのユースたちに感謝しかありません。確かに辛いものや香草が多いラオス料理ですが、お米が主食という文化は日本と同じで、毎日たくさん食べ、しっかり働くことができた一週間でした。



ラオスの流行について

報告者：松平 明子



私は事前にラオスの流行について調べました。ラオスでは豆乳、カラオケなどが流行っていると聞いていました。現地について豆乳を売っているお店は無かったです。それよりもココナッツ系のお菓子の方が流行っているように思えました。

カラオケは流行っているように思います。村でのばんごはんの後、みんなで歌ったり、踊ったりした日がありましたが、その時「カラオケ」という言葉と、とても盛り上がるラオスのユース達の様子から見て、「カラオケ」は私が調べた通り、ラオスの人にとっても楽しい娯楽になっていると思いました。

また、現地で新しく気づいたことは、香りを楽しむもので、流行のものと言うよりは嗜好品をよく見かけました。後で調べてみると、東南アジアではこういうものはみんな使えます。

ホームステイ先が一緒によく一緒に行動していたラオスのユースの子は「シンが流行っている」と話していました。確かにシンをはいている人は多く見かけられました。制服なども女性はシンでした。自国の伝統的な衣服が流行っていることは伝統文化を重んじていて、素晴らしいと思いました。



キャンパーたちの感想

ラオスで得た経験

竹田 京生

私はこのラオスワークキャンプを通して、国を越えて協力し合う素晴らしさ、楽しさを学びました。ラオスに行く前は、期待感よりも漠然とした不安の方が大きかったけれど、村に入り、人々の温かさを感じ、キャンパーの仲間そしてホストファミリーと過ごしていくうちに不安な気持ちはワクワク感へと変わっていきました。ラオスの人はとても温かく、ホスト

ファミリーはいつも笑顔で話しかけてくれました。「今度ラオスに来たときはいつでも電話してこの家に帰っておいで。また一緒にご飯を食べよう。」と言ってくれてとても嬉しかったです。また必ず会いに行きたいと思いました。



ラオス人、タイ人、日本人全員が英語を母国語としていないため、バディともお互いがお互いの言っていることが理解できなかったりしたこともありました。今までの私なら、理解できないと思ったらすぐに翻訳アプリなどに頼ってしまっていたけれど、現地では、言葉につまりながらも一生懸命伝えようとしていて、とても刺激を受けました。自分の言いたいことが母国語のようにすぐに伝えられないもどかしさを感じながらも、完璧な言葉でなくても良いから会話をし、相手に伝えようとするからこそが外国語でのコミュニケーションなのだとわかりました。



たった1週間という短い期間でしたが、バラバラの場所から集まった人同士が、お互いの文化の違いを認め合い共に過ごすことの素晴らしさを感じました。正直、他国のキャンパー同士がこんなにもお互いの距離を縮められるとは思っていませんでした。村での最後の夜のパーティは一生忘れません。そして1週間のワークキャンプを終えるとき、ラオスやタイのキャンパーとまだまだ活動したい、まだ終わりたくないと思いました。家族も友達もいない異国での生活は、自分を表現することの大切さと、相手を思いやる気持ちの大切さを改めて学びました。今回のラオスワークキャンプに参加できたことに心から感謝いたします。この経験を必ず自分の将来へと繋げていきたいです。



コミュニケーション

奥 瑞貴

今回参加したラオスワークキャンプが私にとって初めての海外経験でした。飛行機から既に英語から見たことがない言語まで、たくさんの生きている外国語を肌で感じていました。英語があまり得意ではなかった私は、現地での外国のキャンパー達と対面する時、果たしてうまく話せるのか、意思疎通はできるのかとたくさんの不安がありました。しかし、そんな心配は不要でした。タイもラオスも母国語が英語ではなかったため、お互いに非母国語を話さなければならない状態でした。私がどうしてもできずにオロオロしていると、一緒に日本

から来たキャンパー達がそんな状況にも動じず堂々と接している様子

が目にとまりました。私は、今まで学校で勉強してきたことがすべてではないんだと考え、体当たりで会話をしました。なかなか伝わらなかったり、逆に私が聞き取れなかった時もありましたが、それでも理解できるまで何度も説明してもらいました。それが大きな励みになり、次はもっと早く理解できるように、自分一人の力で聞き取れるようになりたいと思い、やる気が次々にわいてき

ました。結局言いたいことが伝わらなかったこともありましたが、自分

なりに頑張れた結果なので満足しています。最終日にはかなり聞き取れるようになっていて、心の距離もぐんと縮まったと思います。

また、ホストファミリーとは共通言語が無く、コミュニケーションを取ることがキャンパー達よりも難しかったです。最終日までボディーランゲージだけで話していた私達でしたが不思議と心は通じ合っていたように思います。ホストファミリーのおばあちゃんが、目が会うたびに顔いっぱいの笑顔を向けてくれたからかもしれません。

このワークキャンプの中でコミュニケーションをとる時は言語も必要ですが、それ以上に自分の気持ちを相手に伝えたい、と言う強い意志が大事なんだと知りました。このキャンプに参加できて心から良かったと思います。とても良い経験を積むことができ、感謝でいっぱいです。



人生で帰るべき場所

松平 明子



ラオスに行く前は本当に不安しかありませんでした。2 回目の海外で、貧困と呼ばれる国に行く事です。きっと不自由な事も多いと思っていました。また、言葉ももしかしたら通じないかもしれません。ラオスについてタイのユースたちが迎えてくれた時、私の緊張は最高潮でした。ちゃんと話せるだろうか？コミュニケーションできるだろうか？ずっとそのことしか考えられませんでした。



きっと3日目くらいからだったと思います、私がしっかりと話せるようになってきたのは。ラオスのユースの人もタイのユースの人も本当に優しく接してくれました。私は「sleepy」というあだ名がついて、よくそのあだ名で呼ばれていました。また、普段友達と会話するような内容の事をしゃべりあったり、クイズをしたり、日本人の高校生が一番年下という事もあってとても可愛がってもらったんだと思います。Night market では値切ることも手伝ってくれました。

ホームステイ先では、初めてラオスのユースたちと交流した時に、私がインタビューをした女の子と同じお宅で過ごすことになりました。その子は英語がちょっと苦手で、少し困った時もありましたが、翻訳をしたり、ラオス語の本を活用してコミュニケーションを取ることができました。

最後の日、ラオスのユース達で事情があり、来れる人、来れない人がおり、その時すでに悲しい気持ちになってしまいました。私のバディーの子は最後まで一緒にいることができたのですが、その分飛行場での別れ際は涙が全然止まりませんでした。

飛行機の中、ハノイでのトランジット、日本に帰国した直後も、ラオスからもう離れたんだという実感が無くて、帰る時に履いていた「シン」を帰宅後脱いだ時に初めて「ああ、もう日本なんだ」と実感しました。一気に寂しい気持ちが押し寄せてきて、また少し泣いてしまいました。

今回のラオスワークキャンプは私にとって最も濃いキャンプだったと思います。初めての事だらけで戸惑ったり、言葉も文字も全然違っていました。でも私の中で1番思い出深い1週間だったと思います。何度もでもラオスに行きたい！いや、帰りたいと思います！！



キャンプとは。

合田 奈央

私がこのワークキャンプを知ったのは同じブランチで活動していた先輩のおかげです。いつもの野外活動とは違う、私が知らない世界を知っている先輩の話はとても興味深く、行きたい気持ちは毎年募っていました。大学生になって初めて知ったYMCAで、今まではリーダーとしてキャンプを作る側だったので、自分がキャンパーで参加するのは本当に楽しみでした。しかし、いざ自分が行く日になると、最初は本当に緊張しました。海外に行くということ、経験したことのない文化の国、新しい出会い、すべてが私を緊張させる要因でした。一週間後に別れがつかなくて涙を流すなんて想像もしていませんでした。



このワークキャンプを通して、とても印象的で心に残っている出来事を二つ紹介します。まず一つ目は、同じホームステイ先だったキャンパーの優しさです。村では、2人か3人がバディになってホームステイをしました。私のバディはラオスとタイの大学生でした。パクムード村を訪問した日、ホームステイ先に着くと、二人とも「わからないことがあったら何でも聞いてね、ジャスチャーでもなんでもいいから」と何度も言ってくれました。後から聞いた話ですが、ラオスとタイのキャンパーは私たち日本人のために日本の文化のことをかなり勉強していたそう

です。日本人は辛いものが苦手ということを知っていて、辛いものが料理に出ると、必ず「これは辛いよ」と言って教えてくれました。さらに、ラオス語でホームステイ先のご家族と話した内容を、私にもわかるように常に英語で翻訳してくれました。私がホームステイ先の家族にお土産を渡すときも、言いたいことを英語で伝え、ラオス語に訳してホストマザーに話してくれました。私は本当にバディ2人のおかげでホームステイ生活が楽しかったです。

二つ目に印象に残っていることは、パクムード村でのボランティアワーク中のみんなの表情です。ラオスの大学生は本当によく働きます。しかもみんな笑顔です。コミュニティセンターの床をコンクリートにするという行程の中で、土を踏んで固くするという作業があったのですが、ジャンプしたり、前進しては後進して踊りだしたり、本当に楽しそうでした。それを見ていると私たちも楽しくなってきた、初めて会った村の人たちとも目を合わせて笑っていました。初日はどう動いたらいいのかわからなかったし、人数が多い中で自分がどう動けば役に立つのかわかりませんでした。しかし次の日から自分で仕事を見つけることができるようになり、それと同時に疲れも出てきました。そんなときはいつも「大丈夫？」と聞いて笑わせてくれるキャンパーがたくさんいました。ボランティアで来たのにこんなに楽しくてもいいのかなと思うほどでした。

はじめは多くの価値観に触れ自分の視野を広げることが目的でしたが、帰ってきて何が残っているかというと、やはり人のやさしさです。このキャンプで私はさらに自分のあるべき姿を見つめなおすことができました。これからもこのキャンプで得たことを忘れず、精進することが最高の恩返しだと思ってがんばります。



感謝感激の7日間

高月 渚

この度参加させて頂いたラオスワークキャンプでは、人の温かさにたくさん触れ、『心が震えた瞬間』を何度も感じた1週間でした。私は学部時代に首都のビエンチャンで5か月間のインターンシップ活動を行い、ルアンパバーンへも旅行で訪問したことがありました。しかし今回のワークキャンプは、前回以上にラオスの人々や生活、文化と密接に関わることができ、長期滞在を経験した私にとっても「初めて」ばかりでとても刺激的でした。



書きたいことは山ほどあるのですが、以下の2点に絞って振り返りたいと思います。1つ目に、このワークキャンプでは『人の温かさ』というものを身に染みて感じることができました。訪れたパクムード村の人たちは、到着した私たち全員にお花のネックレスをかけてくださり、心温まる歓迎から村での滞在が始まりました。ホームステイ先のお母さんとお父さんは私の英語やつたないラオス語を理解しようとしてくれ、本当の家族のように接してくれました。また4日という短い滞在にも関わらず、フェアウェルセレモニーでは人生の成功と幸せをたくさんの方々から祈っていただき、涙がこぼれ落ちそうになった瞬間でした。パクムード村での滞在

は、感謝の気持ちでいっぱいの4日間となりました。

2つ目に、1週間という短い期間にも関わらず、16人の日本・タイ・ラオスユースたちとは一生続く絆を築くことができました。私たち日本人は、環境の違いや言語の壁により、どんどん進むワークについていけなかったことがありました。しかし、タイとラオスのユースは常に私たちのことを気遣ってくれ、今何をしているのか、何をしたらよいかを教えてくださいました。また観光の際には、ツーリズム科に在籍するラオスユースたちが丁寧にルアンパバーンを案内してくれました。時には言語の壁が立ち上がり、思いが通じないこともありました。しかし、空港で別れるときにはキャンパーみんなが号泣し、言語を超える繋がりが私たちの間に存在していることを実感しました。

このワークキャンプを通して、ラオスのことをもっと知ることができ、より一層大好きになりました。キャンプを目いっぱい楽しむことができ、関わった全ての方々に感謝の気持ちでいっぱいです。パクムード村の方、ユースメンバー、スタッフの皆様にはいつか恩返しすることがこれからの目標です。



日本人キャンパー

合田 奈央
高月 渚
竹田 京生
松平 明子
奥 瑞貴
本田 陽人

YMCAの願い

YMCAでは活動をとおして次のことを学びます。
「自分のいのちとみんなのいのちを大切にすること」
「家族、地域のひとりとして責任があること」
「世界と地球を見つめ、考え、行動すること」
「ボランティア精神とリーダーシップを身につけること」
「すこやかな心とからだを育むこと」

YMCAではこれらを実現するために、
「おもいやり」「誠実さ」「尊敬心」「責任感」を
全ての場面で大切にします。

神戸YMCA国際・奉仕センター

〒650-0001

神戸市中央区加納町 2 丁目 7-11

TEL:078-241-7204 FAX:078-241-3619

